

11月4日(土)の夜遅く、メールを受信しました。それは学生時代の友人のCさんの御夫君からのものでした。Cさんは学生時代の同級生Sさん(アメリカ在住)を中心とするメールグループのお仲間ですが、御夫君は「今日病室で妻が洗礼を受けたい、秋吉さんをお願いしてほしいと言いました」という文面で、病床洗礼が可能ですかという問い合わせでした。Cさんがパーキンソン病で、体調が思わしくない日々を過ごしておられるのを存じていましたが、入院されていたとは。このメールを拝見し、病状がかなり進んでいることを知りました。

2年ほど前、Cさんは教会に行ってみたいと言われ、ご近所の教会を紹介しましたが、体力がないから、行けない、その代わりに、私たち夫婦のホームページを楽しみに読んでいますし、秋吉牧師の聖書講解で聖書を学びますと言っておられたのです。一度も教会にいらしたことはなかったのです。Cさんが信仰をどのように思っておられるか、一度も聞いたことがありませんでしたし、私も遠慮がありました。私は何もお力になれていなかったことを痛感し、申し訳ない思いで一杯になりました。

Cさんの心に、神様が直接呼びかけられたのです。Cさんは病床の苦しみを通して、神様に全てをゆだね、神様の力を頂きたいという願いに導かれたのです。苦難の中から主を呼び求め/わたしの神に向かって叫ぶと/その声は神殿に響き/叫びは御前に至り、御耳に届く。(詩 18:7)とのみ言葉の力の真実を実感しました。神様がCさんのために、この日を備えられたと感謝しました。

夫と相談し、すぐに彼女のご希望に添えるようにしたい旨、返信し、6日(月)に病院に見舞いました。Cさんは牧師の問いにははっきりと答えられ、洗礼の希望を述べられました。それは本当に嬉しいことでした。Cさんの体力がかなり奪われていることは分かりました。御夫君のお話では病気の進行か、あるいは薬による副作用か、その日によって状態に波があるとのこと、意識のはっきりある今、洗礼を希望するということでした。

11月10日(金)に洗礼式が行われました。洗礼は永遠なる神への信仰の告白であり、これによって、新しい人として生き、神と共にあることの祝福の徴です。日本の教会では、洗礼は教会の業として位置づけられていますので、現在私たち夫婦が出席している横浜本郷台教会の牧師に依頼し、洗礼式に立ち合って頂きました。Cさんの洗礼は教会の記録の中にも記されたということです。

Cさんは、病院側が洗礼式だということで特別に用意をしてくださっていて、とても美しく病床で待っておられました。ブルーの上着に白いレースのスカーフをつけて、その上にパールのネックレスをされ、本当に綺麗でした。爽やかなお顔をして、洗礼を希望する旨を言われて、式が始まりました。牧師の問いに一つ一つ答えられて、信仰告白をされ、洗礼を受けられました。喜びに輝いておられました。御夫君と、友人のKさんと私が参列しました。感動で胸がいっぱいになりました。私たちはキリスト教主義の東京女子大学の同期生です。大学の校歌の一節が胸に蘇りました。



神と人 ふかく結びて 少女等の生きる喜び 胸打つはここ
つつましき 祈のうちに とこしえの扉をたたく 旅人われ等



メールグループの友人からもCさんの受洗を祝い、信仰を共にする喜びのメールが届きました。(Sさんより)「私は50歳の時で、うちの家族も反対もなく受け入れてくれました。皆に感謝しています。あの時から信仰の旅路が始まりとぼとぼと歩き続けています。焦らずに行きましょう。」

(Yさんより)高1の時、おそらく大事なことも理解していたとは思えないまま受洗した私。でも未熟だったあの時が私に与えられた‘時’でした。そしてCさんには、今日がその‘時’だったのですね。神様のなさることはみなその時にかなって美しい、という言葉、しばしば思います。

医療は日進月歩で進んでいます。Cさんに適合する方法が見つかりますようにと切に祈ります。それと同時に、何物にも代えがたい神の深い愛の中を歩む喜びに、感謝の思いで一杯になります。